

飛鳥・白鳳期寺院における二重建物

はじめに 建造物研究室では、今期中期計画において、これまで継続してきた第一次大極殿復原研究の成果を踏まえて、古代建築の技術を新たな視点からまとめ直す作業に取りかかっている。本稿ではその視点を典型的に示す事例として、飛鳥・白鳳期寺院における二重建物の構造と意味についての知見を提示したい。

金堂における二重 古代建築における重層構造は、上下重で柱を通さず、柱盤上に上重柱を立てる形式として理解されている。これは二重建物に限らず、三重、五重の塔においても共通とされる。ただし、塔の場合は平面が小規模かつ正方形のため、軸部を固めやすく、一口に重層構造といっても、金堂等の二重建物と塔とは構造の根底に差異があることを認識すべきである。

現存する金堂で二重のものは法隆寺金堂のみであるが、二重であることの意味はほとんど考察されていない。そこに迫りうる素材として、ここでは山田寺金堂を取り上げたい。身舎と庇がともに桁行3間×梁行2間となり、かつ身舎の桁行両端間が中央間に比して極端に狭い、特異な性格の遺構平面ゆえ、その復元は次のように考えられてきた¹⁾。①柱配置の特異性はプリミティブな構造を反映している、②組物は法隆寺に倣い、隅では45度方向のみに挺出する、③側柱間に間柱を立て、中備を入れて放射状組物配置とする。

すなわち、この遺構平面の特異性は、軒支持方法の問題として解釈されてきた。しかし、中備に遊離尾垂木を用いるなど無理のある構造形式を採っており、再考の余地を残している。そこで、平面決定の理由を、軒支持形式から一旦切り離して考察してみたい。

山田寺金堂では、側通りで入側柱筋の延長位置に柱が立たないところに特徴があり、それゆえに軒支持形式と平面が結びつけられてきたが、仮にここに側柱を立てれば、容易に有利な軒支持が実現できる。つまり敢えてそれをせずに庇を3間としているのである。

その理由として考えたいのが、二重建物であるがゆえの柱配置、という観点である。山田寺金堂と相似形の平面を持つ夏見廃寺金堂では、金堂正面の階段が検出されており、その幅が身舎桁行全長と一致している。建物が単層だとすると、この階段側石は柱筋と揃わないことになるので、この状況は、建物が二重で、その上重規模が身舎と一致することを示すものであろう。すると、相似形平面を持つ山田寺の柱配置についても、二重のためのものと想定することができる。

山田寺、夏見廃寺のいずれも、身舎の平面は、桁行と梁間がほぼ3：2の比例となっている。上重規模を身舎と同一とすれば、初重庇が3間等間のため、立面上、上重も3間等間と想定するのが自然であろう。この場合、平の内側2本の柱を正背面で繋ぐ線上に隅組の尻が真隅で納まることとなり、組物の納まりがよい。すなわち、身舎の3：2という平面比例は、二重のための平面形式と考えられる。なお、中央間を16尺と広くとることについては、安置仏の規模と庇柱間とを同調させるための処理と見られ²⁾、結果として身舎両脇間の桁行が小さくなったものであろう。

以上より考えると、山田寺金堂の平面は、上重平面がまず決められ、それに対応するものとして初重平面が設定される、という関係において定められたものと思われる。この見方を法隆寺金堂に適用すれば、上重こそが建物の核をなしているように思われてこよう。

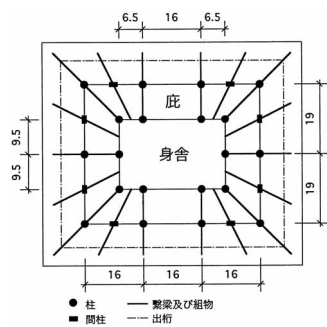


図65 山田寺金堂既往復元案 (飛鳥資料館案)

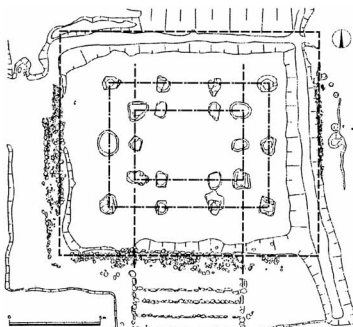


図66 夏見廃寺金堂の柱と階段 (『夏見廃寺』名張市教育委員会より)

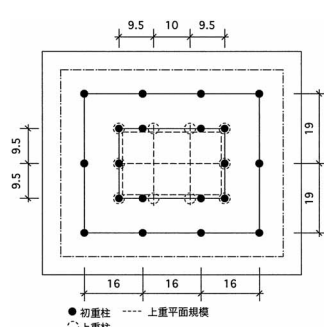


図67 山田寺金堂の上下重柱配置案

門における二重 次に古代寺院の門における二重について考えてみたい。古代寺院における二重門の唯一の遺構である法隆寺中門と、発掘遺構から二重であった可能性が指摘され、法隆寺中門と同じ奥行3間の平面をもつ飛鳥寺中門、川原寺東大門を比較することで門における二重について考察する。

a) 法隆寺中門 まず法隆寺中門について確認しておきたい。柱間寸法は、明治38年に関野貞氏により実測された値³⁾をmmに換算して図に表記する。初重と上重の柱の関係を見ると、上重の柱通りが初重庇の出の半分の通りを廻っている(図68)。言い換えれば、上重の平面規模は初重から桁行、梁間ともに端の間一間分減した大きさとなっている。

b) 飛鳥寺中門 次に、飛鳥寺中門の上重平面が法隆寺中門と同じ技法で計画されたと仮定し、上重の平面規模の復元を試みる。飛鳥寺中門の遺構は礎石のほぼ全てが当初位置のまま残されており、平面規模が明らかである。特徴は、端の間の柱間寸法が桁行と梁間で異なること⁴⁾、桁行の各柱間寸法が尺の完数を示さないことがあげられる。桁行と梁間の総長を比で表すとほぼ4:3になり、1尺=359mmとすると梁間の各柱間が7尺、総長21尺で、桁行総長は28尺となる(図69)。

上重の平面が法隆寺中門と同様に初重平面から端の間一間分(7尺)を減した規模と考えれば、上重の桁行総長は21尺、梁間は14尺となる。上重を桁行三間、梁間二間とすれば各柱間を7尺等間にすることもできる。

さらに推論を重ねれば、飛鳥寺中門の平面は7尺を単位として、上重が3×2、初重が4×3で計画され、初重桁行の柱間を3間にするため28尺を1:2:1の比で振り分けたものと考えられる。この推論によれば初重

の端の間が桁行と梁間で異なるのは隅木を振らせるためのものではないことになり、基壇の出が桁行、梁間で一致していることもそれを示している。

c) 川原寺東大門 川原寺東大門は、飛鳥寺中門と平面規模、柱間配置ともによく近似している。1尺=295mmとすると桁行36尺、梁間27尺となり、飛鳥寺中門と同じく4:3の比を示す。

上重の平面を飛鳥寺中門と同じ方法で復元すると、桁行総長は27尺、梁間は18尺となる。上重を桁行三間、梁間二間とすれば各柱間を9尺等間にする事ができる。つまり、川原寺東大門の平面は9尺を単位寸法として、上重が3×2、初重が4×3で計画され、初重桁行の柱間を3間にするため36尺を7:10:7の比で振り分けたものと考えられる。

以上の考察より、古代寺院の二重門は以下の方法で平面規模が決定されたものと推察される。

上層平面 = 初重平面 - 初重端の間

金堂と異なり仏間(内陣)が必要でないため、初重平面は上重を支える最小限の規模として決定されたのであろう。ここにも、上重平面を念頭においた平面計画をみることができる。

おわりに 以上述べた二重の金堂と門を比較すると、同一寺院内では、両者の初重平面が大きく異なりながらも、上重の規模が近似することに気付く。法隆寺だけでなく、飛鳥寺等でも類推可能である。この現象は、二重建物というものが、初重の一部に上重を載せたものというよりは、一定の規模を持つ上重を支えるために初重の平面を決定する、という順序で考えるべきものであることを示すものかもしれない。つまり、上重の柱間表現こそが建物の核をなすもの、と考えられるのである。

(清水重敦・山下秀樹/奈良県)

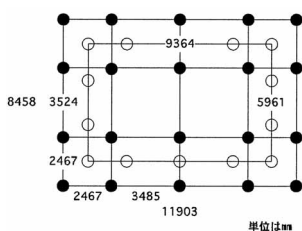


図68 法隆寺中門の上下重柱配置

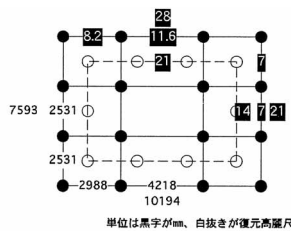


図69 飛鳥寺中門の上下重柱配置案

注

- 1) 山田寺金堂の既往の復元案は、川越俊一・工藤圭章「山田寺金堂跡の調査」(『仏教芸術』122号、1979年2月)及び奈良国立文化財研究所飛鳥資料館『山田寺展』図録(1981年)。
- 2) 村田健一「山田寺金堂式平面建物の上部構造と柱配置の意味」『奈文研紀要2001』。
- 3) 「法隆寺金堂塔婆及中門非再建論」(『建築雑誌』218号、1905年2月)。
- 4) 『飛鳥寺発掘調査報告』(奈文研、1958年3月)において振れ隅の可能性が指摘されている。